

池田雅則『私塾の近代 ——越後・長善館と民の近代教育の原風景——』

二 見 総一郎・古 仲 素 子

0. はじめに

本書『私塾の近代——越後・長善館と民の近代教育の原風景』（東京大学出版会、2014年）は、本コースに在籍していた池田雅則氏が2010（平成22）年度に提出した博士学位論文「私塾の近代—地域指導者層の私塾長善館が果たした役割の変化過程」に、加筆修正を行ってまとめられたものである。本書は、明治時代における近代私塾のケーススタディを通じて、フォーマルな教育に包摂される以前のノンフォーマルな教育の持ちえていた可能性を検討し、フォーマルな教育重視であった戦後の教育学研究に新たな視座を提示した研究である。ここで用いられる「ノンフォーマルな教育」という言葉は、「学校教育の枠組みの外で、特定の集団に対して一定の様式の学習を用意する、組織化され、体系化された教育活動」（4頁）という日本生涯教育学会編の『増補版生涯学習辞典』による定義を引き継いでおり、研究対象となる私塾はここに位置付けられている。本書は、第一章から第三章までの第一部、第四章から第七章までの第二部、第八章から第十二章までの第三部、計十二章で構成されている。全体の流れとしては、第一部「近代における私塾という問題」において研究の意義の提示、先行研究の整理、明治期の私塾の動向を確認し、第二部「漢学塾長善館が迎えた近代移行期」において新潟の私塾長善館の変容を追い、第三部「長善館としての近代教育の模索」において長善館がフォーマルな教育に取って代わられる過程と背景を見た後、近代私塾の持ち得ていた可能性を検討している。以下、本書の概要を確認したうえで、日本教育史研究におけるその意義を問う。

1. 本書の概要

第一章「問題の所在」では私塾を研究する意義及び課題とそれに取り組む際の視点を提示し、独自の仮説を立てている。まず近代私塾を研究する意義と

して、①中等教育制度が確立するまでの間、私塾を含むノンフォーマルな教育機関が「二次的教育」の機会において大きな役割を果たしていたこと、②現代の日本の教育文化において人々の生き方に大きな影響を及ぼしているフォーマルな教育の問題性を明らかにするためには、フォーマルな教育機関の成立過程におけるノンフォーマルな教育機関との関係性を見る必要があること、という二点を挙げている。そして、近代私塾を研究する切り口として、フォーマルな「学歴」に還元されない「学習歴」およびその社会的評価という観点と、「学習歴」を内側から明らかにし、私塾の隆盛を支えてきた「カリキュラム」という二つの視点を提示した。ここで「学習歴」という言葉が使われる理由としては、「個人や結社における非公式・不定形な学習も、人々の人生設計に重大な影響を与える正当な経歴として積極的にとらえたいから」（5頁）と述べられている。以上をふまえ、事例として、大量の史料が残存する新潟県の私塾「長善館」を取り上げることが示されている。従来の教育学研究の欠点で、フォーマルな教育にフォーカスしすぎていたことにあると考えた著者は、フォーマルな教育の面からのみ時代区分されてきた近代私塾の動向を、近代私塾独自の観点から区切る新たな時代区分の仮説を立てる。以上を通して、長善館における研究によって、新たな時期区分の提唱、現代の学歴重視の教育文化の形成に回収されない側面が近代私塾のカリキュラムにあった可能性、そしてフォーマルな教育に回収されない地域基盤に根差した近代私塾のありようが明らかになることを目指しつつ、本論へと移行する。

第一章で提示された時代区分の仮説の確からしさを検討するため、第二章「明治私塾の全国的動向——各種学校統計を手掛かりに」においては全国的な視点から、第三章「新潟県におけるノンフォーマルな教育機関の動向——越後平野を中心として」においては新潟県信濃川流域・越後平野周辺という地域的な視点から、それぞれ明治期の近代私塾の動向

を俯瞰している。まず第二章においては、『各道府県』で発行されていた『学事年報』『統計書』『県治一斑』などの学事統計群を史料として用い、『文部省年表』との差異を確認しつつ、全国的な私塾の動向が考察された。筆者は、『文部省年表』に見られる私塾の増減の転換点として、一八八〇年代前半の各都道府県の「町村立私立学校廃止規則」の運用開始と、一八九九年の「私立学校令」の影響に着目しており、そのうえで、数値以外の変動に一八九〇年代半ばを境とした各種私立学校に求められたカリキュラムの傾向の変化が影響しているとする。一八九〇年代半ばまでには、洋学、通商、商業学や簿記を中心とした各種学校の隆盛、そして従来からの漢学塾への期待があった。一八九〇年代半ばから末にかけてのフォーマルな学校の急速な発達によって不利な立場に置かれた各種学校は、男子生徒を集めるためのカリキュラムの充実化、女子向けの各種学校の隆盛、工業系の各種学校の発生という変化によって再び盛り返しを見せる。しかしながら、一九〇〇年代の各種学校の拡大傾向も、中等教育制度の確立によるフォーマルな学校の社会的地位の強化によって、明治四〇年代には再び遞減傾向に転じた。以上が、本書が提示する明治期における私立各種学校の全国的動向である。

第三章においては、新潟県信濃川流域・越後平野周辺における私塾の動向を、第二章で見た全国的動向と比較している。著者は、各種学校の量的な動向は「全国的動向と一致する傾向」と見る一方で、一八八〇年代にフォーマルな学校が「非中学校化されたり閉鎖されたりした」(97頁)ことに着目し、「県内の公的な中等教育の動向は、ノンフォーマルな教育機関の隆盛の外在的要因のひとつになった」(104頁)と特徴づけている。そのうえで、誠意塾や西軽塾、明訓学校などの新潟の各私塾の考察を通して、教育機関のフォーマル性・ノンフォーマル性が問題とならなかった時代背景の存在を明らかにした。著者は、第二章と第三章の考察を通して、一八九〇年代までは「ノンフォーマルな教育機関の自律性とその発展可能性がこの時期まで機能しえたり、信じられていたことが明らかになった」(154頁)ことを強調している。

第二部、第三部においては、私塾長善館のケーススタディを通して、第一部で提示された問題の検討が行われた。第二部ではまず、一八八〇年代半ば頃

までにおける長善館の基礎的な特徴が明らかにされた。

第四章「地域指導者層の私塾長善館」では、長善館の三種類の門人帳を史料として、長善館の地理的・階層的拡がり、地理的基盤、そして地域的基盤の裾野の広がりや支援の様態を明らかにしようと試みた。著者は、長善館が入門者の全国的な拡がりは持たないものの、入門者の大半が近隣住民であったわけでもなく、両者の中間に位置する存在であったこと、入門者の六割を地域の有力者層が占めており、入門者の多くは地縁や血縁などの人脈によって長善館への進学を選択していたことを示し、その背景には長善館の持つ教育の質や名声に地域指導者層が大きく期待をよせていたこと、長善館が地域指導者層をはじめとする地域的基盤に大きく支えられていたことがあったと考察している。そのうえで、「私塾の教育は現在の学習塾が担わないような多様な役割を担って」(186頁)いたこと、「中央・地方における政策や官公立学校の立案者・設置者の意図とは別なところで、このような近世以来の教育機関が、近代学校と併存しながら地域指導者層の人脈と協力によって自律的に営まれていた」(186頁)ことを改めて確認した。

続く第五章「初代館主文台のカリキュラムと塾生の学習歴——維新时期まで」において、まず著者は、長善館のカリキュラムに「館主による学術講究型の「正規」カリキュラム」と「一部塾生による政治変革型の「非正規」カリキュラム」(190頁)の二種類があったことに着目した。そこから、前者は、経書を重視し字義の正確な理解を目指す文台の影響を受けたものであり、後者は、文台が「随意ニ読ムベシ」とする書の枠を設けたことに端を発するものであると分析した。この「正規」のカリキュラムと「非正規」のカリキュラムによって「全ての学問の基礎となる漢学」(216頁)を身に着けた子弟たちの中には、塾を出て各々の志望に従って各地を遍歴し、さらなる学習歴を積み重ねる者も少なくなく、筆者はこの自主学习を許す「非正規」カリキュラムの自由さに可能性を見出している。

第四章、第五章では長善館の成立期について明らかにされたが、続く第六章「二代目館主惕軒のカリキュラムと明治初期の教育活動——一八七〇年代」においてはその転換を扱う。明治初期における長善館の転換点として本書は、惕軒への代替わりという

塾内の出来事と、学制の発布という塾外の出来事の二点に着目する。まず惕軒への代替わりによる影響として、文台時代のカリキュラムの変化が挙げられている。具体的には、文台時代に「非正規」カリキュラムに含まれていた書物と簡易な算術、撃剣が「正規」カリキュラムに取り込まれるようになり、塾生の学習水準に基づく等級制と定期的な試験が導入された。このことは、長善館は従来の「儒学の研鑽を前面に出す『漢学塾』」ではなく「明治的な『漢学塾』」に変化した(223頁)と評されている。二つ目の転換点である学制の発布は、惕軒を小学校設置に関わらせる形で影響を与え、結果、「惕軒の小学校教育推進活動の多忙な日々が長善館の入門者数減少につながってしまう(250頁)」。しかしながら、子弟からの批判を受けた惕軒が再び長善館の経営に専念するようになると、入門者の数が増えるようになり、このことから著者は、「長善館は小学校と代替不可能な価値を有するとみなされていたこと」(253頁)、「当時の地域において、小学校教育の必要性とは別に長善館のような私塾とそこでの漢学学習が求められていたこと」(258頁)を読み取っている。

第二部の締めくくりとして、当時漢学学習が求められていた背景を、第七章「『つきあいの文化』育成のカリキュラムと指導——一八七〇年代前半」にて検討している。「塾生の多数を構成していた地域指導者層たちが、近世以来、地域共通の問題に対して関心を共有し、時には共同歩調を取る深い関係にあった」(262頁)当時において、地域指導者層は文化的な「つきあい」を広く行っており、その中でも「漢詩文による『つきあい』は、八〇年代の地域において最も活発であった」(264頁)とされる。さらに、遊学先における「つきあい」の構築にも漢詩が大きな役割を担っていたことから、「漢詩文の素養は、指導者層の社会的結合を促進する元手として明治期の子弟にも意味をなしていた」(276頁)と述べられている。

第三部においては、一九八〇年代半ばにおける長善館の変化の前後を、「学制」以降のフォーマルな学校体系の動向と併せて見ることで、ノンフォーマルな教育機関が独自のカリキュラムと学習歴形成を構想しえたことが論じられる。

第八章「遊学促進のための支援とカリキュラム——一八七〇年代から八〇年代半ばにかけて」では、惕軒時代の長善館の「遊学」促進カリキュラムに着

目した。かつての先行研究において、「漢学塾での教育を近代の遊学と関連付けて具体的に論じた研究は皆無に等しい(284頁)」との問題意識に基づいて、著者は、長善館において「門下生の人脈を駆使した遊学」と「遊学を奨励するカリキュラム」の二つの側面に着目した。前者に関して、長善館の培ってきた人脈を活かして行われた支援は入試対策におさまらないものであり、生活や学習への指南も含んでいた。後者に関して、遊学したい子弟への支援だけでなく、惕軒は漢学における子弟との教育実践の中で生徒自身の遊学や成功を積極的に奨励しており、カリキュラムの中に遊学奨励の意識が読み取れる。著者はその遊学を推進する働きかけの中に、個人の発展と齊家と治国を結びつける意識を見出しており、また、「長善館をはじめとする明治前期の漢学塾は、カリキュラムと学習歴において直接に新たに設立された学校と接続しうる可能性があった」(300頁)と述べたうえで、以降で「地域社会に根差す直接的・間接的な人脈に基づく遊学者輩出の役割が、国家的な学校体系の前にその効力を弱めていった」過程を見ようとする。

第九章「上京遊学者の学習歴と経験したカリキュラム——一八七〇年代後半から八〇年代半ばにかけて」では、第八章の内容を踏まえたと遊学子弟の学習歴および一八七〇年代後半から八〇年代半ばにおけるノンフォーマルな学習歴の構造を追う。惕軒の長男である鹿之助の日記を史料とし、その遊学の過程を追うことによって、「カリキュラム重視・水平的移動を伴う学習歴は、その自由度の高さと引き換えに、学習者に大きな負担と困難を強いる不安定な学習歴の慣行であった」(328頁)であったこと、その不安定さにあらがうために、「遊学者たちはお互いにさまざまな縁を頼って情報を入手し、自らの見通しを少しでも明るくしようとしていた」(329頁)ことを明らかにした。そして、このような「ノンフォーマルな学習歴を経ることを不利としない、もしくは問題としない学習歴形成の構造」は「一八九〇年代半ばごろに、ひとつの限界があった」(335頁)という見解が示されている。以降では、この限界までの期間において、学習歴上においてノンフォーマルな教育機関の転換可能性がありえたことの検討が行われている。

第十章「独自の中等教育カリキュラムの模索——一八八〇年代半ばから九〇年代半ばにかけて」

は、一八八五年と一八九二年の二度にわたる長善館の教則改訂の中に、ノンフォーマルな教育の展開可能性を見出すことを目的としている。一度目の八五年改定は、「地域の公立中学校への不信」(345頁)から周囲に期待されて行われたものであり、そのカリキュラム編成は「中学校の「代位」と呼ぶにはあまりに「自主的に」構想され、独自の編成をもって」おり、「初等教育の「補充」「補完」には収まらない、在京の著名な私立学校、中学校や大学予備門と同等の水準をもち、かつ編成者独自の考えが加味された「普通学科」であった」(354頁)と述べられている。この教則改定後に入門者が増加したことも、「長善館が選択されるべき中等教育機関として地域の注目を集めた」(356頁)ことを示している。二度目の九二年改訂は、惺軒の長男である鹿之助の死を受け長善館が閉館の危機にさらされた際に、地域指導者層の積極的な塾の振興要求によって行われたものである。このことは一八九一年がちょうど県内における中等教育不在の時期であったことも後押しになったと推察されている。九二年改定の内容は、八五年改訂ほど独自性は強くはなかったものの、その水準は「フォーマルな教育機関から独自なものを維持しつづけていた」(390頁)と評されている。第十章を通して、長善館が地域からの期待を受けて、フォーマルな学校体制から距離を保った独自の中等教育を構想していたことが明らかになった。

第十一章「長善館の終焉と地域指導者育成の継続——一九～二〇世紀転換期」においては、世紀転換期に終焉を迎えてしまう長善館の変容が描かれる。「中学校令」「小学校令」が相次いだ当時の私立各種学校の衰退は、「フォーマルな学校教育の拡充の中で周辺化されていった私立各種学校の生き残りの策のひとつは、拡充する中等学校・師範学校に付随する「予備校」となる道であった」(397頁)と描かれ、筆者はそのような状況を「時運の激流」と表している。そのような状況下において長善館に関しては、「遊学者排出の役割が後退」(400頁)し、「フォーマルな中等学校(師範学校)入学のための予備教育を担う教育機関へとその地位を後退させ」(401頁)たと述べられている。この役割衰退の原因は、学習歴的に高等小学校以上の魅力を持ちえなかったという外的要因と、カリキュラムの縮小、一人で漢学を教えていた惺軒の死という内的要因が影響していると考察されている。衰退の道をたどった長善館に対し、それ

でも著者は、一九一二年まで長善館が門人を集められた背景に、遊学に限らない地域的基盤からの期待を見出し、そこに「地域指導者層育成」という独自の役割があったことを明らかにした。実際、塾閉鎖後に長善館は郵便局となり、館主は郵便局長となって地域の指導者としての役割を果たし続けた。長善館は、フォーマルな中等教育にとって代わる役割を失ってなお、「フォーマルな教育機会に対して独自に担いえる領域があった」(421頁)と述べられている。以上をもって、「フォーマルな「学校」や「学歴」に、ノンフォーマルな「私塾」や「学習歴」が隷属化されていった一つの筋道とひとつの段階が一応明らかになった」(422頁)とし、本書の探求は終わりを迎える。

終章である第十二章「まとめと展望」においては、本研究の整理と今後の課題が提示される。本研究で明らかになったこととして、①一九八〇年代半ばまでの中等教育において、私塾を含むノンフォーマルな教育機関が学習歴の社会的評価とカリキュラムの面においてフォーマルな学校に対し相対的に独自の地位を維持していたこと、②私塾がフォーマルな学習歴を重視する思考の定着に対抗しうる可能性を持ち得ていたこと、③私塾にはフォーマルな学校に対して独自な内容と水準を有する近代教育を模索する系譜があったこと、④地域に根差した教育文化が反映された独自の役割を私塾は維持しつづけたこと、の四点が挙げられており、それを受けて今後の研究の展望として、①地域指導者層の内面形成と私塾のカリキュラムがどれだけ関連づけられるのか、②他の地域、階層との比較から何が見えてくるか、③ノンフォーマルな学習歴という視点から、既存のカリキュラムに新たな時期区分や役割を見いだせないか、④歴史的来歴の異なる他の国家ではノンフォーマルな教育機関はどのような役割、変遷をたどったのか、という視点が挙げられた。

本書では、明治時代におけるノンフォーマルな教育機関の具体的事例としての長善館の変容が、様々な史料に基づき、時系列に沿って丁寧に描かれている。長善館の変容を描き出す際に、カリキュラムや学習者の遍歴の考察だけでなくとどまらず、当時の民衆からの期待や地域指導者層の文化的背景にまで言及して語ろうとした試みは、ノンフォーマルな教育を当時の文脈に即して理解するうえで大きな役割を果たしたと言える。

ただし、民衆とノンフォーマルな教育との関係が明らかにされた一方で、民衆とフォーマルな教育との関係性のとらえなおしに関しては、不明瞭な点があったように感じた。第十一章では、ノンフォーマルな教育機関としての長善館がフォーマルな教育に取って代わられる過程が、「長善館における中等教育が「時運の激流」の中で後退した」(421頁)こと、それに伴って「学歴上の役割における高等小学校との相対化をもたらした」(401頁)こと、そしてそれに「塾のカリキュラムの縮小」(403頁)と「二代目館主揚軒の死」(404頁)が重なって長善館の閉鎖が決定されたと描かれていた。しかしながら、これらの記述のみでは「民衆がどのような期待をフォーマルな教育機関によせるようになったのか」という点について疑問が残った。フォーマルな教育機関の立ち位置を相対化するためには、「フォーマルな教育機関がどのような過程を経て民衆に受容されていったのか」というフォーマルな教育と民衆との関係をとらえなおす課題が浮かび上がってくるだろうが、その際、本書が提示したノンフォーマルな教育機関からの視点が大きく意味を持つてくるだろう。

(二見総一郎)

2. 教育のノンフォーマルな側面への着目とその意義

先の概要でも述べられているように、本書は長善館を主な対象としながら、「ノンフォーマル(non-formal)な教育機関の一つである私塾および、そのカリキュラムに着目することで、「フォーマル(formal)」すなわち「オフィシャルな制度史研究・学校史研究では把握できない、さまざまな形で組織化されてきた民間における教育・学習活動の事実を明らかに」(2頁)することを試みた労作である。

本書で行われている、ノンフォーマルな側面に着目することでフォーマルな教育制度を相対化しようとする試みは、先行研究の整理において著者自身も挙げているとおり、著者の師であり、本研究室(当時・教育学研究室)の教員であった土方苑子による、「実態」の歴史に着目した研究と問題意識を共有している。土方は「近代日本教育史研究では、長く制度、政策の研究に重点が置かれたため、今なお全国での教育の実態に根拠を置く歴史像が成立していない」ことを問題視し、「法制度による時期区分をまず破

棄」して「学校、教育の実態に立脚した時期区分を作」り、その上で「制度、政策史による時期区分の意味も再度検討すべき」と提言している¹⁾。また、土方は各種学校に関する研究の中でも、各種学校の「制度化された学校〈以外〉の学校」の総称という性格を把握することで、「制度化された学校とは何か、の問題性が一層クリアになる(中略)と共に、現在の各種学校、私立学校という学校の歴史的重要性もまた認識される」と述べている²⁾。本書においても、私塾というノンフォーマルな教育機関自体の変化に着目しながら、「学習歴」とその社会的評価にかかわる視点、および長善館における「カリキュラム」の視点からそれぞれ時期区分がなされている。そして、そのような時期区分を行うことで、これまでの国家制度や政治状況などにもとづいた時期区分を再検討するとともに、私塾が当時の教育において持っていた独自の役割や意義について再考しようとしている点は、注目に値する。

本書においては、まず、統計資料を手掛かりとしながら、全国の各種学校および新潟県におけるノンフォーマルな教育機関という全体の動向の中で長善館を位置付ける。その上で、『長善館学術資料』を主な史料とし、日記史料や作詩文、門人帳やカリキュラムに関する史料を駆使することで、長善館の経営の様子や当時のカリキュラム、塾生の学びの様子を鮮やかに浮かび上がらせている。中でも、塾生の自主学习の様子や長善館と地域指導者層とのかかわり、そこでの「つきあい文化」を背景とした独自のカリキュラムについて丹念に明らかにした点は、特筆すべき点である。さらに、長善館の遊学促進のカリキュラムや塾生の遊学のありようについても詳細に解明されており、これは近年の教育社会学における学生の上京に関する歴史研究³⁾とも併せて、明治期における学生の地理的移動と、そのプロセスでノンフォーマルな教育機関が果たした役割を問う重要な成果である。

そして、ノンフォーマルな教育機関のフォーマルな教育制度との関係について、本書では「ノンフォーマルな教育機関が、フォーマルな学校体系が示したモデルから完全に自律した学習歴とカリキュラム編成を描きえたわけではなかった」(432頁)と述べられている一方で、「近代を迎えたノンフォーマルな教育機関が新たに模索したカリキュラムの編成や水準には、フォーマルな制度の枠組みとは異なる多元

性・独自性がみられた」(434頁)ことが強調されている。このようなノンフォーマルな教育機関とフォーマルな制度との関連については、ノンフォーマルな側面がフォーマルな側面に影響を与えた可能性も視野に入れつつ、今後様々な地域の事例のさらなる比較検討が必要だと考えられる。

本書はこれまで教育史分野において十分な蓄積がされてこなかった私塾における学びの実態の解明に、はじめて本格的に取り組んだとも言える、画期的な著作である。そして、教育のノンフォーマルな側面については、例えば教科と教科外活動の関連など、未だ検討が充分になされていない部分も数多く存在する。今後、本書のようなノンフォーマルな側面への着目により、教育のフォーマルな側面が様々な角度から照射されること、そして、著者の研究がより一層発展することに期待したい。

(古仲素子)

註

- 1) 土方苑子『近代日本の学校と地域社会—村の子どもは

どう生きたか』東京大学出版会、1994年、3-5頁。

- 2) 土方苑子「『各種学校』という研究対象—総括と展望」
土方苑子編『各種学校の歴史的研究—明治東京・私立学校の原風景』東京大学出版会、2008年、338頁。
- 3) 武石典史『近代東京の私立中学校—上京と立身出世の社会史』ミネルヴァ書房、2012年。武石は近世における「遊学」に対して、明治期には「諸国遍歴の時代は終焉を迎え」、「急激に東京が「別格化」し、学問のために上京する行動が意味をもちはじめた」(12頁)と述べているが、本書の検討からは、明治期に入っても大都市への遊学準備として、地方のノンフォーマルな教育機関が一定の役割を果たしていたことがうかがえる。

付記：本原稿は、「編集規定」(3)の8に基づいて編集委員会が執筆を依頼したものである。池田雅則『私塾の近代』(2014年1月)は、2010年度に本研究科に提出された博士論文を基にした本研究室OBの著作であり(巻末の学位論文一覧参照)、早期に書評を掲載することが望ましいと編集委員会で判断した。(編集委員会)